

The Car Which I Loved (10) VW Vento

一昔前のドイツの質実剛健なモノづくり

吉田英生 (S53/1978卒)



本シリーズにはポルシェ、BMW、初代トヨタクラウン、ユーノスロードスターなどの名車が登場したため、これといった特徴のない？大衆車は話題にしにくいかもしれませんが。「いやそんなことはない」と本シリーズ初回のコロナSFに続く大衆車路線で強がりをも？ 父が遺した車ですが、せっかくなので車

検が切れる1996年くらいまではと乗ってみたVW Vento をご紹介したいと思います。1974年に初代Golfがジウジアーロ (Giugiaro 1938-) によるデザインで登場したのち、1983年にGOLF II、1991年にGOLF IIIとなり、翌1992年にこれを3ボックス化したのがVentoです。前代まではJettaという名前でした。なお、Golfはドイツ語でメキシコ湾流を示すGolfstrom、Jettaはジェット気流、Ventoはポルトガル語でポルトガルからイタリアに吹く風のことだそうです(余談ながらロールス・ロイスのジェットエンジンにはWellandやTrentなどイングランドを流れる川の名前が付けられていますね)。

まず、ちょうど30年前に生まれた車ということで、最近話題になっている半導体の視点から。いわゆるカーエレクトロニクスは1970年代から普及し始めましたが、このVentoでは、パワートレーン制御系やボディ系では半導体が用いられていたものの、ABS (Anti-lock Braking System) を除けば走行安全系や情報系までは至っていません(現在では当たり前のETCの普及も20年前の2001年以降です)。なお、最近の半導体不足で生産にブレーキがかかっている現在の車に搭載される半導体は30以上、高級車では100を越えるそうですね(カーエレクトロニクスの専門家は京機会に多数おられますので、どなたか解説をいただければ幸いです)。

車本体に戻りますと、一言で表現すると無骨で頑丈な車。ドアを閉めるときにも実感する強靱な剛性感、国産車に比べると硬めのサスペンションによる安定した走行感、インストルメントパネルのスイッチが大きく押しごたえのあることなど、骨太なボディに守られている安心感は国産車にはないものでした(余談ながら、方向指示器がハンドル左側なので、交互に乗っていたコロナSFと混乱してよく右側のワイパーを動かしてしまいました)。加えて550リットルというトランクルームも当時このクラスでは最大でした。徳大寺有恒氏も「最新・間違いだらけの外国車選び(草思社、1994)」で「価格面で文句はあるがやはり最高の小型車だ」と評していましたね。そんなドイツ魂とも表現すべきVW社の質実剛健な姿勢を高く評価していただけに、2015年9月に発覚した同社のディーゼルエンジン排ガス不正事件には幻滅しました(本稿準備中に三菱電機の不正が発覚しましたが、同種のことが絶えないですね)。1995年からちょうど20年の恋に終止符。



不正事件で本記事を終わるのは後味がわるいので、ドイツのモノづくりに関して、車から外れますが、お口直しを。筆者がドイツ製品と関わった数少ない2例についてです。

その一つは中学生時代（1969年前後）蒸気機関車を追いかけていたところ、祖父から譲り受けたLEICA IIIIf (Summicron 50mm F2.0付き；スクリューマウント)。これは一眼レフが普及する前の1950年代の名機で、レンジファインダー（光学視差式距離計を組み込んで距離測定に連動して撮影用レンズの焦点を合わせられる）付きカメラでした。レンジファインダーと本来のフレーミング用の（ビュー）ファインダーが別になっていますので、ファインダー接眼部が2個あります。丸くて構えやすいボディの底蓋を開けると、筆者の記憶では、右図太線のような頑丈な厚肉ボディ断面が目に飛び込んできました。フィルムのパトローネやリールが丸いこともありますが、実に自然で無駄がなく美しくかつ頑丈な設計だったと思います。なお、余談の余談ながら、この延長線上にCANON 7型カメラ <https://global.canon/ja/c-museum/product/film42.html> があり、なかでも市販の写真レンズの中では最高に明るい超大口径レンズ CANON 50mm F0.95 <https://global.canon/ja/c-museum/product/s43.html> は憧れの的でした（当時の高感度ネガフィルムは、Kodak TRI Xの ISO(ASA)感度400などでした）。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Leica_IIIIf_diagramme.jpg



もう一つのドイツ製品は、機械ではありませんが、高校生時代1971年に購入したadidasのサッカーシューズ「フ란ツベッケンバウワー」。1974年のワールドカップ・西ドイツ大会で西ドイツを優勝に導き「皇帝」の名で呼ばれた名将にちなむシューズです。筆者が高校時代を過ごした田舎のスポーツ店には現物を揃えてあるはずもなく、サッカーマガジンの広告だけ見て取り寄せたところ、最初箱から取り出したときは、期待に反してビニールレザーの安っぽい質感かつ飾り気もない外観にがっかりしました。しかし履き込んでみると靴下だけを履いて走り・蹴っている感じなのです。つまり極薄のカバーで足表面が傷つかないように覆っているだけという最小限の機能を持たせたシューズでした。当時、こんな地下足袋のようなコンセプトで作られたサッカーシューズは我が国のメーカーにはなかったと記憶します。これもまたドイツ魂！

お待たせしました！

モデル2000の姉妹品

フ란ツベッケンバウワー

全サイズ入荷

ピッタリとフィットするフィーリングの良さは、猛烈ダッシュ、弾丸シュートも思いのまま。初心者・中級者向けのスクリュースタッド。

¥5,900

サッカーマガジン1971年7月号より
なんとちょうど50年前！